

## 認知科学的視点からの新たな道徳性発達理論構築への試論

### ——「重複波モデル」を援用して——

#### An Attempt to Construct a New Theory of Moral Development from a Cognitive Scientific Perspective: Thinking from the Perspective of the “Overlapping Wave Model”

辻 和 希  
TSUJI Kazuki

本稿の目的は、認知科学的視点から新たな道徳性発達理論を構築するための手がかりを得ることである。そのためにまず、従来の道徳性発達理論を概観し、その問題点を確認する。つぎに、認知科学領域で従来の発達「段階」に代わる理論として提唱されている「重複波モデル」(overlapping waves model)について確認する。「重複波モデル」で道徳性の発達を捉えようとする際には、道徳を個人の性格特性として見る立場からの反論、道徳性を行為主体の意思だけの問題として捉える立場からの反論が想定される。それぞれの立場への反駁を試み、道徳性の発達を捉える方法として「重複波モデル」が一定の妥当性を持ちうることを示す。そのうえで、どのような道徳性の発達モデルを作成できるか検討する。

キーワード：道徳性発達理論、重複波モデル、モラル・アフォーダンス

### 1. はじめに

本稿の目的は、現代の認知科学的視点から新たな道徳性発達理論を構築するための手がかりを得ることである。そのためにもまず従来の道徳性発達理論を概観し、その問題点を確認する。つぎに、認知科学領域で従来の発達段階に代わる発達理論として提唱されている重複波モデル (overlapping waves model) について見ていく。最後に、これら二つの理論から新たな道徳性発達理論の大枠を検討していく。

本論に入る前に本稿における「道徳性」について定義をしておこう。一般的に「道徳」とは、ある時代、ある地域、あるグループ内で承認されている行動の準則である<sup>1)</sup>。そして、「道徳」は、「人として守るべき規範および尊重する価値」として捉えられるものであ

る<sup>2</sup>。教育学者の村井実は、慣習に由来する道徳を「社会的利害からの指令」、「宗教的指令」、「生活習慣からの指令」、「本来的に道徳的な要求」の四種類に区分している<sup>3</sup>。

「本来的に道徳的な要求」とは、カントがいうところの「定言命法」(Kategorischer Imperativ)と言い換えることができよう。ある目的に対して手段として行為を命じる「仮言命法」(Hypothetischer Imperativ)に対し、「定言命法」は普遍的な法則であり、無条件に行為を命じる。それゆえ、定言命法はあらゆる状況において守るべき規範としての性格をもつ。

ジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952) は、こうしたカント倫理学がはらむ弱点を「理性と傾向性とを対立させ、後者を排除するところに理性の自律が存するところ」に見ていたという<sup>4</sup>。デューイの問題意識は、カントの定言命法が禁止する範囲外の領域、つまり、自由に振る舞うことが許された範囲の行為をどのようにして導くかということであった<sup>5</sup>。そして、自由な行為を導いていくものとして仮言命法に再注目するのである<sup>6</sup>。その具体的な方法として、デューイは個別の状況に対して自然科学的な方法を適用して考える方法、つまり、反省的道徳の必要性を説いた<sup>7</sup>。自然科学では、さまざまな自然現象を理解するために適切な法則や原理を用いる。同様に、反省的道徳においては、個々の状況を考えるための手がかりとして慣習的な道徳を使用し、それぞれの状況に応じた道徳的判断を導く。

以上をふまえ、本稿における「道徳性」とは、個々の状況に対して慣習的道徳や反省的道徳を用いて考え、行動できる力とする。では、こうした「道徳性」の発達に関して、認知心理学の分野ではどのように捉えられてきたのであろうか。

## 2. 認知心理学分野における道徳性発達理論

認知心理学の分野で道徳性発達理論を説いたものとして一般的に知られているものは、ジャン・ピアジェ (Jean Piaget, 1896-1980) やローレンス・コールバーグ (Lawrence Kohlberg, 1927-1987) の理論である。また、コールバーグの理論に異論を唱えたものとして、キャロル・ギリガン (Carol Gilligan, 1937-) の理論、国内の研究では蘭千壽・河野哲也らの理論がある。ここではそれぞれの理論の大枠を確認する。

ピアジェの道徳性発達理論は、社会学の立場から道徳について論じたエミール・デュルケム、集団心理学の立場から論じたポール・フォーコネ、ピエール・ボヴェ、ジェイムス・マーク・ボールドウィンらを批判的に論じつつ、構築された。その理論を構築する際、ピアジェは子どもの遊びを観察し、規則への意識が三段階に分けられると推測した (表1)。子どもたちの道徳性の発達段階は、規則に対する意識がない段階から、外的な力によって規則を遵守させられる他律の段階を経て、自分自身で規則を制定する自律の段階に至る。「道徳性の発達と知的発達の平行性」や「道徳的な規範と論理的な規範の間に存在している類似性」というピアジェの記述からは、彼が道徳性の発達を、認知能力の発達と平行的に進んでいくと推測していることがわかる<sup>8</sup>。しかし、この発達段階は人間の心理的な発達を包括的に示すものではない。そもそもそのような包括的な発達段階は存在しないとピアジェはいう<sup>9</sup>。このような記述からは、実際の子どもの道徳性を評価することに対して、自らの理論には限界があることをピアジェ自身も認めていたことが窺い知れる。とはいえ、ピアジェの道徳性発達理論は、道徳性の発達と認知の発達の両方を区別した上

で、両方の発達についてともに論じた点で当時としては革新的なものであったという<sup>10</sup>。

表1 規則への意識の段階

1	運動的・個人的段階 (4歳以前)	規則に対する義務意識は存在しない。
2	他律の段階 (4歳～8歳)	規則は大人から発生し、大人から与えられると考える段階。規則は永続不可侵のものとして捉えられる。
3	自律の段階 (10歳頃から)	規則は自由に決定した結果のものとして捉えられる。規則は変更可能なもので、誰でも手続きさえ正しければ、規則に対して意見を述べるができる

Jean Piaget, *Le jugement moral chez l'enfant* より筆者作成。

コールバーグは、ピアジェの研究をさらに拡大し、より細かな3水準6段階の道徳性の発達段階を示した。このコールバーグの道徳性発達理論は、「ハイイツのジレンマ」とともに道徳教育分野のなかで繰り返し言及されてきた。表2はコールバーグの道徳性発達理論における各段階とその詳細である。コールバーグは「カントからロールズにいたる道徳哲学—倫理学の主張を批判的に検討し、あらゆる道徳判断が『正義』の論理に基づいて行われて」いる点を明らかにし、自らの道徳性発達理論の軸に「正義」を据えた<sup>11</sup>。社会的な価値である「正義」という基準を取り入れることで、コールバーグは倫理学と融合的に語られ、社会学に対しても開かれた道徳性発達理論を作り上げることができたのである<sup>12</sup>。

しかし、「正義」に軸を置いたコールバーグの道徳性発達理論は、男性的な視点で考えられた発達段階であり、女性的な視点を欠いていると、弟子のギリガンに批判される<sup>13</sup>。ギリガンによれば、女性が道徳の問題を考えるときには、責任と思いやり (responsibility and care) に焦点が当てられ、自分と道徳性の概念 (conceptions of the self and the morality) が密接に結びついているという特徴があるという<sup>14</sup>。そのような判断傾向がある女性は、コールバーグの発達段階では、大抵の場合、第三段階に留まるという。つまり、コールバーグの理論では女性の道徳性の発達を適切に評価できないというのである。それゆえ、正義に軸を置いた男性的な道徳性発達段階ではなく、「ケアの倫理」の視点から再構築した道徳性発達段階をギリガンは提案する (表3)。

以上のように、ギリガンはコールバーグの正義を基準とした道徳性の発達に対して、ケアとしての道徳性を対置した。しかし、公平・正義を基準とした倫理とケアの倫理は相反するものではなく、相補的なものであると指摘する研究もある<sup>15</sup>。哲学者の河野哲也は、「道徳の普遍性や公平性」を「融通のきかない一般法則を個々のケースに押し付けることではなく、能う限り多様な他者に同情すること」とし、公平・正義の倫理にケアの倫理を組み込んだ理論を考案した<sup>16</sup>。こうした道徳性を発揮するためには、他者に配慮するためには他者の言葉を聞くことが必要であるという。それゆえ、「多様な他者とのコミュニケーションが統合的な自己変容に繋がっている場合に、その個人や組織の倫理性は高い」ものとして評価される<sup>17</sup>。こうした新たなコールバーグとギリガンの理論の解釈・統合の下、倫理教育プログラム開発し、その効果を測定するために開発された尺度が表4の「倫理意識尺度」である。

表2 コールバーグの道徳性発達理論

前慣習的 段階	第1 段階	罰と服従への 志向	自分が行った行為に対して、罰があるかどうか が問題になっている。罰を受けないことや権威者 に追従することが良いとされる。
	第2 段階	道具主義的 相対主義への 志向	自分や他者の望みを満たすことが正義とされる。 この段階の人にとって人間関係は、市場原理的な ギブ・アンド・テイクな関係でしかない。
慣習的 水準	第3 段階	対人的同調 あるいは 「よい子」 への志向	善い行為とは、他者を喜ばせ、助けることである と考えるようになる。多数派の意見や「普通」と される行動をとる。身近な人の目が気になり、 「よい子」でいようとする。
	第4 段階	「法と秩序」 の維持 への志向	権威や規則、社会秩序の維持を重視する。正しい 行為は、自らの義務を果たし、権威を尊重し、既 存の秩序を維持することと考えるようになる。
脱慣習的 水準	第5 段階	社会契約的 遵法への志 向	この段階の人は、功利主義的な考え方が特徴であ る。正しい行為は一般的な個人の権利や社会全体 によって吟味される。合法的かつ民主的方法で合 意に至る手続きを重視する。それゆえ、適切な手 続きならば法の改正も認める。
	第6 段階	普遍的な倫 理的原理への 志向	論理的包括性、普遍性、一貫性に訴えて、自分で 選んだ倫理的原理に一致する良心の決定によって 正しさが規定される。この倫理的原理は、抽象的 なものであり、普遍的な諸原理である。

コールバーグ『道徳性の発達と道徳教育：コールバーグ理論の展開と実践』  
岩佐信道（訳）、広池学園出版部、171頁～173頁より作成。

表3 ギリガンの道徳性発達段階

前慣習的段階	生存を確かにするために自己をケアする段階（道徳以前）
慣習的水準	良い行いとは他者をケアすることと捉えられる。他者へのケアが自己犠牲と同等視される。自己犠牲的道徳と自己の欲求の間に葛藤が生まれる。
脱慣習的水準	自己と他者がケアの対象になる。

Carol Gilligan (1982) *In a different voice: Psychological theory and women's development*, Harvard University Press, Cambridge, pp.73-74 より作成。

表4 倫理意識尺度の三段階

①自分自身の利益や欲求に合うように行動することが正しいとされる「利己主義」水準。
②現実の所属集団や社会の慣習的秩序や他者からの期待に沿うように行動することが正しいとされる「所属集団への忠誠心」水準
③先の現実の所属集団や社会における諸規範を越えて、個々人の妥当性と普遍性をもつ原則に照合して、自己の原則を維持するように行動することが正しいとされる「普遍的倫理」水準

蘭千壽・河野哲也編著（2007）『組織不正の心理学』慶應義塾大学出版会、  
147頁より作成。

ここまで一般的に広く知られているピアジェやコールバーグの道徳性発達理論とそれに関連する発達段階を概観してきた。このように一般的に道徳性発達段階は、階段上の構造であり、ある一定の年齢になる、もしくは、一定上の経験を経るとその階段を上がり、より上位の発達段階に到達する。コールバーグは一度上位の段階に移行すれば、そこから下位の段階へと退化することはないと考えていた。

このような発達の捉え方は理解しやすいものの、私たちが実際に行なっている道徳的判断のあり方を捉えられているとは言い難い。なぜなら、私たちは、あるときは利己的に、あるときは利他的にと、時と場合に応じて道徳的判断をするからである。言い換えれば、道徳性には「ゆらぎ」があるといえる。階段上の発達理論では、前の段階に戻ることは想定されていないため、こうした「ゆらぎ」を理論的に説明することができない。それゆえ、私たちの道徳性の発達をよりの確に捉えるためには、「ゆらぎ」に関しても説明できる、新たな発達観が必要になる。そこで、認知科学の分野で階段状の発達段階の代わるものとして考えられている「重複波モデル」の発達観から道徳性の発達を捉えることを試みる。

### 3. 重複波モデルの発達観

前節にみた道徳性の発達と同様、認知の発達段階は階段のメタファーによって捉えられてきた(図1)。子どもたちはある年齢の期間、その期間に特徴的な考え方をし、つぎの期間の年齢になると今度はその期間に特徴的な考え方をするようになる。そして、一度その階段を上ると基本的には下ることはない。このような発達観の例として、ピアジェが提示した「保存性の概念」がある。ピアジェはおはじきを使用した実験をおこなった。実験の概要はつぎの通りである。

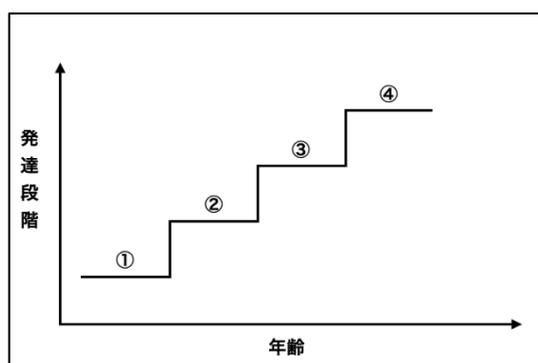


図1 階段状の発達段階

実験者は、子どもの前におはじきを同じ数ずつ並列するように並べる(図2)。2列のおはじきは、対になって並べられ、列の長さも同じである。この状態でどちらも同じ数かを子どもに質問すると、4・5歳位までの子どもはどちらも同じ数と回答する傾向が高い。つぎに、子どもの前で片方の列のおはじき同士の間隔を拡げて、同じ質問をする。すると、4・5歳位までの子どもは、間隔を拡げた方が多いと回答する傾向が高くなった。一方で、6歳位の子どもの場合は列の間隔を操作してもどちらも同じと答える傾向が高い。この実験からは、4・5歳位までの子どもは見かけに依存した数の保存性の概念をもつものに対して、6歳くらいになるとその依存から脱することが示されたのである<sup>18</sup>。

しかし、後年になると、こうしたピアジェの実験に対して批判的な研究が出てくる。ピアジェの実験では脈絡もなしおはじきの間隔が変形させられていた。その脈絡を補った場合、子どもの回答がどのように変化するかを調査した研究がある<sup>19</sup>。この実験では、ぬいぐるみの劇を通じて、「バッグに入れるために」といった文脈を与えておはじきの間隔を変えた。すると、文脈を伴う変形をおこなったときの子どもたちの正答率は、文脈なしの

正答率よりも格段に上がる結果となった。つまり、保存性の概念がないと考えられていた年齢の子どもにも保存性の概念があることが明らかになったのである。

子どもの保存性の概念について、その理由づけに注目した認知科学者のシーグラ―は、保存課題に対する子どもたちの理由づけの数を調査した。理由づけとは、間隔が異なる二列のおはじきに関してどちらが多いかと問われたとき、「長いから、こっちの方が多い」と子どもがいったときの、「長いから」の部分のことである。この調査の結果、子どもたちの多くは、一つの理由づけではなく、複数の理由づけをする傾向が見えてきたという<sup>20</sup>。この結果から、子どもたちは保存課題を解決するために複数の戦略をもっていることが明らかになった。そのため、従来の階段状の発達段階では、子どもたちの認知能力を説明できなくなった。そこでシーグラ―は、その発達過程を捉えるための「重複波モデル」(図3)を提唱した。

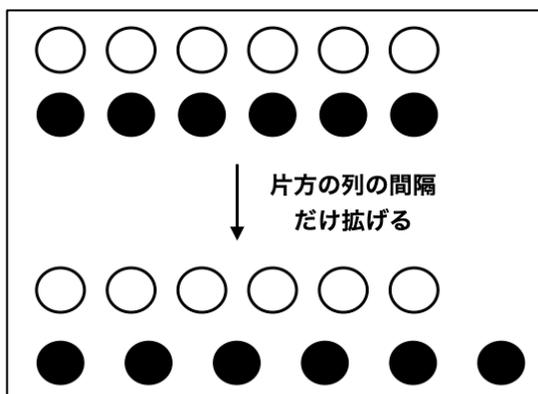


図2 おはじきの実験

この発達モデルは、従来の階段上状の発達観を脱し、認知機能の発達の捉え方を転回するものである<sup>21</sup>。「重複波モデル」では、子どもたちが一つの時期(年齢)に複数の戦略(=認知リソース)を使用することが想定され、年齢を重ねていくごとにそれぞれの戦略の使用頻度に変化していくことが考えられている。たとえば、図3の特性①は、比較的若い時期にはよく見られ、時間が経つとともにその特性は見られなくなる。しかし、特性①が強く出る時期であっても、特性②や特性③、特性④がまったく見られないわけではない。これらの特性は年齢を重ねていくごとにその出現頻度は変わるものの、まったく無くなるわけではない。

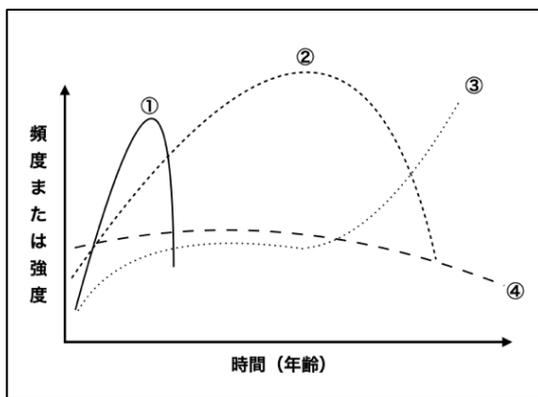


図3 重複波モデルの発達観

認知科学者である鈴木宏昭は、「重複波モデル」の利点の一つとして、従来の発達段階が前提としている「無から有」といったものを考慮しなくていい点を挙げている<sup>22</sup>。たとえば、従来の発達段階では、おはじきの保存課題に関しても、ある年齢では見かけの大きさを根拠に判断する子どもが、年齢が上がると論理的な推論を根拠に判断することが想定されている。この質的に異なる二つの判断方法の間には埋め難い断絶があり、ここに「無から有」の前提がある。しかし、シーグラ―が明らかにしたように、実際の子どもたちは課題解決のために複数の方策を用いている。それゆえ、「重複波モデル」の発達観では、年齢に応じて特定の方策をとる傾向が強くなるという説明が可能になり、「無から有」が生じるという問題は起こらない。また、上野らの実験をふまれば、状況や文脈によってもそれぞれの戦略の出現頻度に変化し、そのような経験を積み重ねることで、

ある状況に対して特定の戦略を採用する傾向が強化されていくことが予想される。「重複波モデル」では、経験を通して特定の戦略が強化されていくことも説明可能になる。

以上のように「重複波モデル」は子どもの発達を捉える視座として一定の妥当性をもつ理論だと思われる。それでは、「重複波モデル」から道德性の発達を眺めるとどのように捉えることができるだろうか。

#### 4. 「重複波モデル」から道德性を見ることへの反論

「重複波モデル」は20年以上前から提唱されてきたにも関わらず、認知科学分野外では、その認知度は依然として高くはない。「重複波モデル」は、道德性の発達を捉えていく点でも有益な視座を提供するものだと思われる。そこで本節では「重複波モデル」を基礎とした新たな道德性発達理論の構築を試みる。

しかし、道德性を「重複波モデル」で捉えていくことは可能なのだろうか。そこには大きく分けて二つの反論が予想される。すなわち、①道德性は性格の問題であり、性格は状況に関わらず、一貫したものではないのか、②道德性が状況や文脈に応じて変化するのか、という反論である。この種の反論に関しては、①性格の非一貫性、②道德的行為におけるアフォーダンスといった視点から答えることができる。

##### ① 性格の非一貫性

「性格」に関しては、心理学者によってその定義が異なるとも言われており、包括的な定義をすることが難しい用語である。さしあたって本稿では、行動の原因と想定される個人の感情・意思の特性としておく。「性格」に関しては、状況に影響されることがない一貫した特性だと、一般的には捉えられているところがある。つまり、優しい人は誰に対しても優しく、どのようなときも優しい、あるいは、怒りっぽい人は時間や場所に構わず怒りっぽいという認識である。「性格」が個人のなかで一貫したものであるという考えは、MBTI (Myers-Briggs Type Indicator) 診断による性格診断がSNS等を通して人口に膾炙している実情を見ると、現代においては自明視されているように思われる。

それゆえ、道德教育に関しても、個人の中に優しさや素直さ、慎ましき等の状況に左右されない一貫した性格を育成するものだと信じている人もいる。この立場の人は、一度「優しさ」という「性格」が個人のなかに形成されれば、さまざまな場面でその個人は「優しさ」に基づき行動できるようになると信じているのである。このように性格の一貫性を信奉する立場の人からすれば、文脈依存的な行動や道德性の「ゆらぎ」を前提とする「重複波モデル」の発達観は受け入れ難いものであろう。

しかし、性格の通状況的（あるゆる状況で共通した）一貫性に関しては、心理学の分野ではすでに否定されている。この性格一貫性の否定は、1968年から始まり1980年代まで続いた「一貫性論争」を経た結果である<sup>23</sup>。その発端となったのが、ミッシェル著『パーソナリティの理論』であった。この著書の中でミッシェルは、それまで自明視されていた性格の通状況的一貫性を否定し、「性格特性を人の要因と状況要因とが相互作用した『結果』として生じる行動パターンを記述するものと位置づけ直している」<sup>24</sup>という。現代では、こうしたミッシェルの指摘が大筋では正しいものとしてみなされ、「一貫性論争」は終結している。

性格が状況要因との関係のなかで生み出されるものであるとすれば、仮に道徳性が性格の問題であったとしても、「重複波モデル」でその発達を捉えることが可能ということである。むしろ、「重複波モデル」で捉えることではじめて、道徳性を性格の問題として考えることができるといえるであろう。

## ② 道徳的行為におけるアフォーダンス

アフォーダンスとは、米国の心理学者ジェームズ・ギブソン (James Jerome Gibson, 1904—1979) が提唱した概念である。環境が動物に対して提供する (afford) 価値や意味を指す。ギブソン以前は、周囲の環境から得られる刺激を認知する主体が処理し、価値や意味を見出すという考え方が一般的であった。一方、ギブソンは価値や意味といったものが環境の側に宿っていると考えた。それゆえ、認知する主体はその価値や意味を受け取り、その環境に適合する行動をとる。

アフォーダンスの視点からは、道徳的な行動もある一定の環境から提供された価値や意味に適合した行動をとったとみなすことができる。道徳的な行動を個人の心の問題に帰する心理主義的傾向が強い場合、環境によって道徳的な行動は左右されるという「モラル・アフォーダンス」<sup>25</sup> の考え方は受け入れにくいものであろう。しかし、こうした「モラル・アフォーダンス」に関連する先行研究はすでいくつか存在している。

例えば、E.Jayawickreme & A.Chemero らによる、徳が表出する環境に焦点をあてる必要性を指摘する研究がある<sup>26</sup>。この研究では、道徳的なふるまいをする機会を「アフォーダンスの道徳的類似」(A moral analogue of an affordance) と呼称している。その具体例として、家族と夕食をとっているときにユニセフへの募金を依頼する電話がかかってきた場面を挙げている。実際に募金をするか否かは、行為する主体の内面的な条件 (外国人への嫌悪感の有無・ユニセフへの不信感の有無) 以外にも、外的な状況 (車の修理代の支払い・子どもの学費の支払い) もふまえて決定される。

ほかにも環境犯罪学の分野で提唱されている「割れ窓理論」もモラル・アフォーダンスの一例として見ることができるだろう。米国の心理学者ジョージ・ケリングが提唱した「割れ窓理論」とは、窓ガラスを割れたままにしておくと、その建物が管理されていないと捉えられ、不法投棄やいたずら書きが増加し、治安の悪化に通じ、犯罪が多発するようになるという犯罪理論である。翻っていえば、軽犯罪を取り締まることで、重大犯罪を抑止することができるという理論でもある。現に米国のニューヨーク市では、ルドルフ・ジュリアーニが市長を務めた時代に「割れ窓理論」を用いた治安回復政策を行い、重大犯罪を大幅に減少させることができたと言われている。このニューヨーク市の事例も環境によって人々の行動が変化させられたものであり、モラル・アフォーダンスの具体例として見ることも可能である<sup>27</sup>。

あるいは、有名な「トロッコ問題」に関しても状況に応じて、その回答傾向が変わることが指摘されている。この指摘もモラル・アフォーダンスの一例として捉えることが可能である。「トロッコ問題」は、1967年に倫理学者のフィリッパ・フットが自身の論文<sup>28</sup>で提示して以来、モラル・ジレンマの一例として頻繁に引用されてきた。その基本的なシナリオは次の通りである。

あなたが線路脇に立っていると制御不能の列車が走ってきます。列車はレール上を走行しており、先には5人の作業員がいます。あなたは、列車を別の線路に切り替えることができますが、その線路には1人の作業員が立っています。あなたが何もしなければ、列車は5人の作業員に突っ込むこととなります。どのような選択をしますか。

このように列車を別の線路に切り替えることで1人か5人を選択するものは「分岐線」問題と分類される<sup>29</sup>。この問題から派生する形で提案された問題が「歩道橋」問題である。これは倫理学者のジュディス・ジャーヴィス・トムソンによって提示されたモラル・ジレンマである<sup>30</sup>。その基本的なシナリオは次の通りである。

あなたが線路を見下ろす歩道橋に立っている。すると制御不能の列車が走ってきます。列車はレール上を走行しており、先には5人の作業員がいます。あなたは、隣にいる歩道橋から身を乗り出している太った男性を突き落とせば、列車を止めることができます。そあなたが何もしなければ、列車は5人の作業員に突っ込むこととなります。どのような選択をしますか。

「分岐線」問題では、間接的な働きかけ（線路を切り替える）ことによって、一人を犠牲にし、五人を救うことができるジレンマであったのに対し、「歩道橋」問題では、直接的な働きかけ（太った男性を突き落とす）ことによって列車を止めることができるようなジレンマになっている。

心理学者であるジョシュア・グリーンは、「分岐線」問題と「歩道橋」問題等のトロッコ問題を被験者に回答させるという実験を行った。その結果、「分岐線」問題では線路を切り替えて一人を犠牲にすると回答する人が多かったのに対して、「歩道橋」問題では男を突き落とさないと回答する数が多くなったという<sup>31</sup>。このような結果になった原因をグリーンは二つの要因で説明する。一つは、「人身的な力の直接の適用によって被害者に危害が加えられたのかどうか」<sup>32</sup>という要因である。要するに、自分が人に直にふれて危害を加えるという行為が被験者に嫌悪感を与えるということである。もう一つが、「手段として被害者に危害が加えられたのか、それとも副次的影響として危害が加えられたのか」<sup>33</sup>という要因である。つまり、5人を救う手段として意図的に誰かに危害を加える（突き落とす）よりも、線路を切り替えた結果誰かに危害を加えることのほうが人は許容できるという。「歩道橋」問題の場合は、直接的かつ手段として男性に危害を加えるため、その行為に嫌悪感を持つ傾向が高くなる。ちなみに、直接的かつ副次的に男性を犠牲にする場合、非直接的かつ手段として男性を犠牲にする場合では、男性を犠牲にすることを厭わない傾向が強くなるという（表5）<sup>34</sup>。

以上、モラル・アフォーダンスの概要およびその事例を見てきた。ここで取り上げた事例からは、道徳的行為は行為主体と環境との相互作用から生まれてくる結果だといえよう。だとすれば、行為主体の道徳的認知能力にのみ焦点をあてるピアジェやコールバーグに代表される従来の発達観では、道徳性の発達を評価できないことは明白である。一方で、状況や文脈に応じて認知とそれに伴う行為が変化することを前提とする「重複波モデル」であれば、モラル・アフォーダンスを視野に入れた発達を考えることができるであろう。

表5 トロッコ問題の回答傾向

	手段としての男性への危害	副次的な被害としての男性への危害
直接的な接触がある	① 男性を犠牲にすることへの嫌悪感が高い	② ①に比べると男性を犠牲にすることへの嫌悪感が低い
直接的な接触がない	③ ①に比べると男性を犠牲にすることへの嫌悪感が低い	④ ②、③よりも男性を犠牲にすることへの嫌悪感が低い

筆者作成。

### 5. 「重複波モデル」から考える道德性の発達観

これまでの議論をふまえて、最後に「重複波モデル」を基に道德性の発達モデルがどのようにして作ることができるかを検討してみよう。ただし、ここで示すものは従来の道德性発達段階を参考に作成する試案である。

ここでは二つのパターンを提案する。一つは、縦軸を道德的な行為の頻度・強度、横軸を年齢にしたものである(図4)。仮に、これを「年齢型重複波モデル」と呼ぶ。このモデルでは、コールバーグ、ギリガンの理論を統合した蘭・河野の理論を基にして重複波モデルの発達観を作成した。まず、利己的な行動・考えが出てくる傾向がある年齢では①「利己主義」水準が他の二つの水準よりもその頻度で高まると想定する。しかし、②「所属集団への忠誠心」や③「普遍的倫理」の水準にあるような行動がまったく見られないわけではない。つぎに、学校や会社などさまざまな集団に所属し、所属集団への忠誠心が求められるようになる年齢では、②が他の水準の頻度よりも高まるだろう。最後に、会社等の集団を抜け、死期も近づく年齢では、利己的な考えや自分が所属集団の利益だけを考える見識から抜け出し、達観した視点から判断を下せる③が他の水準よりも高まると予想している。

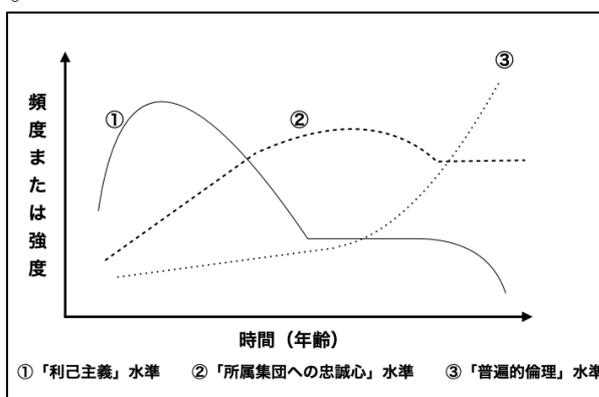


図4 「年齢型重複波モデル」

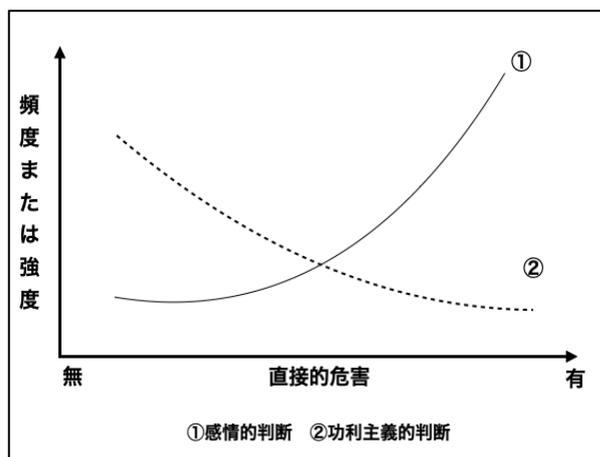


図5 「状況型重複波モデル」

もう一つのパターンは縦軸を道德的な行為の頻度・強度、横軸を状況にしたものである。仮にこれを「状況型重複波モデル」(図5)と呼ぶ。ここでは横軸に直接的危害の有無を置く。このモデルは、「トロッコ問題」での議論を基に重複波モデルの発達観を作成した。

グリーンは、理性によって道徳的な判断を下そうとするとどのような人間であっても功利主義的な判断をする傾向があるという<sup>35</sup>。一方で、直接的な接触があることで理性的な判断が不可能になると感情による判断が優勢になるという。グリーンの実験結果を基に作成した図5では、①の線は、直接的危害の傾向が高まるのに比例して感情的判断の傾向の頻度が高まることを示している。②の線は、直接的危害の傾向が低い状態では功利主義的判断は頻度が高まることを示している。ここでは二次元グラフで「状況型重複波モデル」を検討した。ここに「意図的な危害」の軸を加えて三次元グラフで作成することも可能であろう。

## 6. おわりに

本稿で提案した「年齢型重複波モデル」と「状況型重複波モデル」は、従来の道徳性発達段階とはまったく異なる発達観である。ここまでの検討で明らかのように、「ゆらぎ」を伴う道徳的判断を評価するうえで、「重複波モデル」は私たちに有益な視点を提供する可能性を秘めている。

しかし、本稿はあくまでも新たな道徳発達理論を構築するための試論に留まるものである。ここで提案した「年齢型重複波モデル」と「状況型重複波モデル」に関しては、それぞれの年齢でどのような道徳性がより顕著に見られるか、ある状況に対してどのような道徳的判断が下されるのか、こうした問題を検証によって明らかにすることが、理論として構築するうえでは不可欠である。そのためには、可能な限り多くの被験者を対象とした実験を実施し、データを集める必要がある。

また、「状況型重複波モデル」に関しては、どのような状況を横軸として設定すれば、適切な発達観になるかを検討する必要がある。というのも、金銭的余裕の有無、子どもの有無、「割れ窓」(自分の周りの軽微な犯罪)の有無など、道徳的判断に影響を与える状況は無数にあると思われる。それぞれの個別的な状況に対して、どのような道徳的判断が下される傾向があるかを明らかにすることは難しい。それゆえ、さまざまな状況を一貫して捉えられるような軸がどのようなものなのかを検討する必要がある。

以上のように、本稿で提案した「重複波モデル」を基にした道徳観には依然として課題が残されている。これらの課題に関しては、今後の研究で一つひとつ検証を重ねていきたい。

### 【註】

- 1 「道徳」林達夫 他 編 (1971) 『哲学事典』平凡社、1010 頁。
- 2 神崎繁「道徳」大庭健 他 編 (2006) 『現代倫理学事典』弘文堂、623 頁。
- 3 村井実『道徳教育の論理』東洋館出版社、1981 年、95～109 頁。
- 4 行安茂 (2003) 「デューイ倫理学の再評価」杉浦宏編『現代デューイ思想の再評価』世界思想社、104～105 頁。
- 5 早坂忠博 (2002) 「デューイ倫理学の視座」『理想』第 669 号、理想社、127 頁。
- 6 同上。
- 7 John Dewey, (2008) *John Dewey The Later Works, 1925 - 1953: 1932, Ethics*, Southern Illinois University Press.

- <sup>8</sup> Jean Piaget (1992) *Le jugement moral chez l'enfant*, Presses Universitaires de France, 1992, p.322.
- <sup>9</sup> *Ibid*, p.61.
- <sup>10</sup> 関口昌秀 (2009) 「ピアジェは道徳性の発達段階をどのように考えたか? 『子どもの道徳判断』を読む(2)-」 『神奈川大学心理・教育研究論集』 28, p.63-77.
- <sup>11</sup> 紅林伸幸 (1993) 「物象化理性と道徳性問題：コールバーグ道徳性発達論をこえて」 『東京大学教育学部紀要』 32, 147-155.
- <sup>12</sup> 同上。
- <sup>13</sup> Carol Gilligan (1982) *In a different voice : Psychological theory and women's development*, Harvard University Press, Cambridge, pp.5-23.
- <sup>14</sup> *Ibid*, p.105.
- <sup>15</sup> 蘭千壽・河野哲也編著 (2007) 『組織不正の心理学』慶應義塾大学出版会、143-144 頁。
- <sup>16</sup> 同書、145 頁。
- <sup>17</sup> 同書、147 頁。
- <sup>18</sup> Jean Piaget, Alina Szeminska (1941) *La genèse du nombre chez l'enfant*, Neuchâtel : Delachaux & Niestlé, pp.77-122.
- <sup>19</sup> 上野直樹・塚野弘明・横山信文 (1986) 「変形に意味のある文脈における幼児の数の保存概念」 『教心研』, 34,94—103.
- <sup>20</sup> Robert Siegler (1999) How Does Change Occur: A Microgenetic Study of Number Conservation, *Cognitive Psychology*, 28, pp.225-273.
- <sup>21</sup> Robert Siegler (2002) Microgenetic studies of self-explanation. N. Granott & J. Parziale (Eds.), *Micro development: Transition processes in development and learning*, UK: Cambridge University Press.
- <sup>22</sup> 鈴木宏昭 (2016) 『教養としての認知科学』東京大学出版会、220 頁。
- <sup>23</sup> 「一貫性論争」に関する詳細は、渡邊芳之 (2010) 『性格とはなんだったのか：心理学と日常概念』新曜社、65-88 頁を参照されたい。
- <sup>24</sup> 同書、72 頁。
- <sup>25</sup> 「モラル・アフォーダンス」という言葉は、Jayawickreme らの研究で示された概念である。Eranda Jayawickreme & Anthony Chemero (2012) Ecological Moral Realism: An Alternative Theoretical Framework for Studying Moral Psychology, *Political Psychology*, Vol.33, No.1, p.171.
- <sup>26</sup> Eranda Jayawickreme & Anthony Chemero (2008) Ecological Moral Realism: An Alternative Theoretical Framework for Studying Moral Psychology, *Review of General Psychology*, Vol.12, No.2, pp.122-123.
- <sup>27</sup> 日本の学校の一部では、道徳教育の一環として清掃活動に力を入れているところがある。掃除をすることでなぜ道徳性が磨かれるかという問いに対しては根拠のある明確な答え出すことは難しいであろう。しかし、モラル・アフォーダンスの視点からであれば、整備された環境のなかで児童生徒の行動が変容することを説明することができよう。
- <sup>28</sup> Philippa Foot (1967) The Problem of Abortion and the Doctrine of the Double Effect, *Oxford Review*, No. 5, pp.5-15.

- 29 デイヴィッド・エドモンズ (2016) 『太った男を殺しますか? : 「トロリー問題」が教えてくれること』 鬼澤忍 (訳)、太田出版、19 頁。
- 30 Judith Jarvis Thomson (1976) Killing, Letting Die, and the Trolley Problem, *The Monist* 59, no. 2: pp.204–217.
- 31 ジョシュア・グリーン (2015) 『モラル・トライブズ : 共存の道德哲学へ (下)』 竹田 円 (訳) 岩波書店、289～296 頁。
- 32 同書、294 頁。
- 33 同上。
- 34 同書、291～293 頁。
- 35 「功利主義は、人間のマニュアルモードに本来備わっている哲学であり、功利主義への反発は、どれも突き詰めればオートモードに由来する」(ジョシュア・グリーン (2015) 『モラル・トライブズ : 共存の道德哲学へ (上)』 竹田円 (訳) 岩波書店、257 頁。) マニュアルモードが理性による道德的判断であり、オートモードが感情による道德的判断のことである。